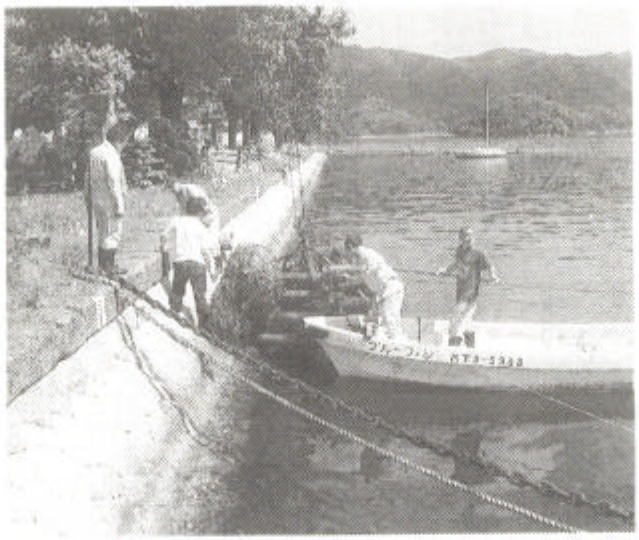
京大学生新聞　（第3種郵便物認可）　平成16年（2004年）　6月5日

本学フィールド科学研究センター

「森と海は共存する」

舞鶴湾に木製の魚礁設置



間伐材製の魚礁を設置する様子

山下洋 所長

本学フィールド科学研究センター舞鶴水産実験所（舞鶴市）は先月二十一日、実験所脇の舞鶴湾の海底に、間伐材製の魚礁を初めて設置した。今後月一回ないし三回、採水やスキューバ潜水により、間伐材魚礁から海水中へ直接流出する成分や、間伐材魚礁周辺の動植物現存量、生物生産量、生物種組成などを二年間にわたって調査する。

森の生木を海底に沈没させて、人間の活動や気候、地域特性などの森と海の間に介在する外因を除去。直接的に樹木の沿岸海域での生物生産への影響を調べ、森と海の生態系間の連環機構を解明していく。

また、木と葉の存在及びそれから流出する化学成分が沿岸海洋域の生物生産と生物多様性に与える影響を解析。間伐材魚礁の集魚効果のメカニズムを考察していくという。

間伐材は京都府美山町の森林ステーション芦生研究林のものを使用。スギ製の針葉樹の魚礁とブナやカエデなど六種の広葉樹からなる魚礁、そして対照実験用のビニールパイプ製魚礁を各三基で計九基造った。

同センターの教授らが、縦・横各一・五メートル、高さ一・三メートルほどの魚礁九基を岸から約三十メートル、水深約七メートルの海底に、各種類交互に十五メートル間隔で沈めた。

山下洋同実験所所長の話

漁業者は古くから森に木があれば海が豊かになるということを経験的に悟っていた。それを間伐材の魚礁を調査することで科学的に証明し、森と海をめぐる神秘の世界を解き明かしていきたい。